

民間説話にみられる根源相

——北米インディアンの場合——

1

「民間説話」(folk tale) という言葉は莫然と口承説話全体をあらわすものと考えられ、事実、英語では、「家庭の話」(household tale) または「おとぎ話」(fairy tale)、『ドイツ語では「メルヘン」(Märchen)、『フランス語では (conte populaire)、『ノルウェー語では (eventyret)、『スウェーデン語では (saga)、『ロシア語では (skazka) にあたる語を指す。

それは民衆のなかで長い間、口承され、伝承されたすべての形式の散文体の話——もともと実際の話そのものを散文、韻文に分けることは困難である——らしきもの

萩原力

はすべて含められると考えられる。アアネル・トンプソンの『民間説話の型』⁽¹⁾によると、これらの話はヨーロッパから西アジアの地域内に発生し、その話型は約七〇〇に達したことがみとめられている。

ところで、かくのごとき研究をするに際し、いかなる研究領域が存在し、そのうちのどの分野に限定し論ずるかが問題となる。一般に「民間説話」(以下、「民話」と略す)の研究は大きく分けて三領域が想定される。すなわち、(1)蒐集(2)分類(3)分析④構造⑤機能⑥起源である。

(1) 蒐集の作業は当該研究におき、もともと重要な部分である。研究者は、直接、民衆の口から民話を蒐集する必要がある。ただ、蒐集するのみでは意味がない。準

備作業として、民話についての詳細な知識をもち、その組織にも注目しながら蒐集しなくてはならぬ。いいかえってみるならば、民話群を決定しながら作業をすることにしよう。民話はしばしば、時間と空間を超越して存在する。そのため研究活動を狭く限定せず、材料蒐集の範囲を拡大する方法をつねに考えなくてはなるまい。

(2) 蒐集された民話は、類話・異話に整理し、それぞれの群に分ける必要がある。この目標を達成するには、物語をそれぞれの主要部分に、この部分を更に、主要な特徴に分ける。特徴の本来の形式が判明した際、これを連鎖していく。すると民話全体の原型が浮彫されてくる。

(3) 蒐集された民話を形態論的、構造的に研究することである。この部分の研究活動は、比較的最近、手がつけられたばかりである。以上、研究領域を鳥瞰したが、かくのごとき広範囲にわたる領域をすべて研究対象とすることは到底不可能といえる。そこで小論では、(1)蒐集(2)分類の研究はひとまずおき、(3)分析(民話の構造と機能)に焦点をあて、論ずることにする。

2

民話は世界全域、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ大陸にみられる。そしてそこに居住する民族がこれら自身の民話をもっている。ところで、これらの民話のうちに互いに共通している要素が存在していることが発見された。お互い、遠く離れた国において、そのような民話が存在するということをいかように考えたらいいのか。もしこれらの民話が古くからあるものとすれば、それは何処から来たものだろうか。かくのごとき質問がなされるのは当然であろう。

一説によれば、かれ等はヨーロッパのおもな言語はすべてサンスクリットと深い関係があることを発見し、ヨーロッパの話と近東、ベルシャ、インドの話との間の共通点を指摘した。

また、他の説によると、昔話の発祥地はインドであると考え、インドのカシミールの詩人、ソーマデーヴァの「パンチャタントラ」の派生語であるアラビアとベルシャにその源流を求めたといわれている。そして後程、西欧で「七賢人物語」、「シンディバッドの獅子」となった話はすべて、その源をサンスクリットの「パンチャタントラ」に求められたのである。やがて「パンチャタントラ」に求められたのである。やがて「パンチャタントラ」に求められたのである。やがて「パンチャタントラ」に求められたのである。

ラ」の中の動物物語は殆んど大部分、西欧（ギリシャ）の起源であることも判明した⁽³⁾。他方、歴史的に、ヨーロッパへの回教徒の侵入と征服、二〇〇年間にわたる蒙古人のヨーロッパへの君臨という事実からも「パンチャタントラ」の東洋と西洋のかけ橋的な役割が容易に首肯される。

では一体どのようなお話のテーマが一般にみられるのであろうか。その代表的なものとして「ブシケー」（「美女と野獣」）、「シンデレラ」、「親指小僧」、「眠れる森の精」、「青い鳥」、「白雪姫」などがみられる。

これらのお話はもともと荒唐で、理性的でも空想的でもなく、また、意味にみちた秩序だったものでもなく、混沌とした形式のないものだった。そこには放恣、グロテスク、狂愚、憂愁の深さがたゞよい、運命と罪が容赦なくおそいかかり、出来事の内的必然性もほとんどみられなかった。

しかし、これらの茫漠とした民話にたいし、統一的、包括的解釈をこころみる人が現われた。その代表的人物がまさしくグリム兄弟であった。かれ等がひとつのモチーフ、またはモチーフ群を説明するためあらゆる努力

をはらったことは余りにもよく知られている事実である。

ところで、民話には必ず、モチーフがあるわけだが、それが単一の場合と複合の場合と双方の場合がある。前者では「動物に関する物語」、「おろか鬼」などに関する型の話で、それらほとんどすべては単一モチーフからなっている。しかし、民話の大部分のものは複合民話で、通常、数多くの異なったモチーフからなり、そのモチーフはさらに小さなモチーフと連鎖している。

ときに、モチーフとは一体何であろうか。ここで定義づけをこころみることにはやや困難からしれぬ。だが、あえていうならば、それは伝承のなかに生き残る力をそなえもった説話のなかの最少のエレメントといえる。

S・トンブソンによるとモチーフには(a)行為者(b)もの(c)事件という三つの型があり、具体的に(a)物語のなかの行為者—神、動物、魔術師、人食い鬼、妖精のごとき異常な存在—(b)行為の背景にあるもの—呪物、変った習慣、信仰—(c)単一の出来事、などをあげ、これらをモチーフと言っている。トンブソンは、更に、説話を構成するエレメントの一致と類似を表示することを目的とし、モチーフ・インデックス(説話モチーフ索引)⁽⁵⁾を、ま

た、同一話型のすべての類話は発生的なつながりがあることを示唆するものとして、タイプ・インデックス(話型索引)を作成した。

3

ところで、小論において世界中のすべての民話を扱うことは到底不可能である。そこで対象を北米インディアンの民話に限定し、考察してみようと思う。その理由は次のような事柄による。

(1) ベネディクト、ボアズ、ジェイコブス、トンブソンという数多くの民族学者・人類学者がいるが、未だ、アメリカ・インディアンの民話に打ち込んだ人は極めて少ない。

(2) 研究領域として、蒐集、分類、分析が考えられるが、殊に、分析(構造、機能、起源)の分野の研究はほとんど未開拓の分野である。

(3) ヨーロッパの民話は比較的、一貫した筋をもっているが、アメリカ・インディアンの民話はひじょうに気まぐれなモチーフの集合体で形成されている。そのため、ある意味で、かなりユニークな解釈を下せる点で興

味深い。

(4) トリストラム・P・コフィンによると、アメリカ・インディアンの民話は、単一の出来事からなっており、それは人間のきわめて素朴な心から発生したものである。一例をあげると、形式が一定であるのになんとも内容がきわめて変わり易い。

(5) F・C・バーレットによると、アメリカ・インディアンの民話は比較的、原始的な社会においてつくられたので形式もパターンもない。

(6) S・トンブソンの「モチーフ・インデックス」および「タイプ・インデックス」の利用が可能である。

(7) 理論体系が十分に構築されていないため、北米インディアン民話を分析する決定的な方法論は、まだ、開拓されていない。

一般に、北米インディアンの文化は七つの文化圏に分れていると考えられている。即ち、

- (1) 南東部文化圏(ナッチェス族、クリーク族)
- (2) 東部森林地帯文化圏(イロコイ族)
- (3) 北極・亜北極地帯文化圏(エスキモー族)
- (4) 北西海岸地帯文化圏(トリンギット族)
- (5) 西部文化圏(ポモ族)
- (6) 南西部文化圏(ズニ族)

族) (7) 大平原地帯文化圏 (ダコタ族) である。

アメリカ・インディアンほど広汎にわたる神話・説話・伝説をもっている原始民族はめずらしい。実際、このような広大な地域にまたがるかれ等のもつ説話の差異は驚くばかりである。しかし、ある地方の説話には共通した語りの型をもっているとされている。説話の視点からみた場合、各文化圏に境界線はなく、説話の相互交換がおこなわれていたことは当然の事柄と考えてよからう。

ところで、北米インディアンの民話をよく観察すると、ひとつの法則がみられる。それは説話の構成がつねに均衡を保持するように志向されている点である。これは恐らく、民話というものの成立過程と関係があるのかもしれない。つまり、ある民話は何のようにしてその「豊饒さ」を喪失したか。また、いかにして「欠乏」が解消されたかを物語っている。もっと具体的な話にするため魔法民話を取りあげ、精査してみると、はっきりとひとつの共通した特徴がみとめられる。それは殆んどの説話において、満足させる結末をもっているということである。つまり、主人公は数々の試練をくぐり抜け、その使命を

果たし、勝利を得る。なかにはこの原則の例外もみられるが、その場合はその改変についての説明がつくのが普通である。

恐らく、語り手は、一般に、女性または老人の場合が多からう。それは未開民族の間で集団の儀式を司る人、説話・神話・伝説の語り手がそのような人々であったからと想定できるからである。

ときに、魔法民話と夢との間にある類似性を見いだすのは偶然なのであろうか。どうやらその本質的要素は人間のもつ欲望と関係がありそうだ。未開人は普通想像さされているほどロマンティストではない。かれ等はきわめて実利主義者である。未開社会に必ず、タブーが存在するものもそのあらわれと思われる。何故ならば、タブーはかれ等の共同体の秩序を維持していくのにきわめて有効だからである。

タブーの尊重を教えこむために、それに服従しなかったり、ある種の儀式をおこなわぬことはきわめて危険であるということを目的とした話が数多くみられるが、少しも不思議でない。こういう話が、ある意味で、社会秩序を尊重する道徳であるとすれば、他の話は一種の素材

な人生哲学である。

ところで、トンプソンの言うように、伝統的な話型ではたいてい、単一の事件をあらわすモティーフからなっている⁽⁸⁾。それは物語を構成する素材である。いふなれば民話はモティーフの総和のようなものといえる。そこでここでは、民話を構成するモティーフをもっぱら、構造的単位としてとらえ、民話の構造を比較・研究することに焦点を絞る。したがって、説話のなかで、ある事柄が何回なされたとか、言われたとかいうことはさして重要な要素ではない。重要なのは民話を形成するモティーフの機能である⁽¹⁰⁾。すなわち、モティーフによって形成されるパターン——モティーフ素の連鎖⁽¹¹⁾——である。民話のモティーフは、それが構造的に関係づけられている限りにおいて、つねに、相互に関係しあっているはずである。このような仮説に立ち、北米インディアンの形態論⁽¹²⁾へ入ることにする。

4

まず、最初はもっとも簡単な二個のモティーフ素からなる連鎖の構造を示す民話から考察する。

それは〈欠乏〉(Lack)——〈解消〉(Lack Liquidated)である。

すでに述べたように、民話には、あるものの喪失、そしてその喪失をいかに解消するかという、いわば人間存在にとって基本的な欲望解消のモティーフがきわめて顕著にみられる。北米インディアンの民話においても例外でなく、それはつねに説話を構成する中核的モティーフとなっている。

ところで、〈欠乏〉とは一体どのような状態を意味するのであろうか。また、どのような形によりその状態が惹起されるのであろうか。つまり、〈欠乏〉の生じてくる予備的部分につき考える必要がある。

〈欠乏〉とは、一口に言って、「⁽¹³⁾が留守である」、「⁽¹³⁾が不在である」という状態とみなすことが可能である。もっと具体的にいえば、人間・動物・植物の「死」、「ある事柄の不在」がそれにあたる。

次に、〈欠乏〉の生じてくる予備的部分について考えてみると、「何か⁽¹⁴⁾が欠乏している。これを持つとうと欲する」、すなわち、人間・動物・植物・物が不足し、これがひとつの行動の過程の発端を誘発する。そして時には魔法の

手段、魔力をもちいることにより、「初めの不幸もしくは
は欠落」が取り除かれる。⁽¹⁵⁾

さて、只今から具体的に、直接、諸々の説話にあたり、
そのうちにみられるモティーフ素の連鎖を精査してみる
ことにする。

5

マレサイト族の間にみられる「せき歩めた水」の話で
は、

アグラベムという人が世界じゅうの水を全部しまつて
おいた。そのため川、湖水は干上がり、人々はあちこち
で死にはじめる (T)。やがて、アグラベムのところへ使
者がかかわされ、彼に水を出してくれと頼む。アグラベ
ムはこの要請をことわる。そこで使者は木を一本切り倒
す。この木は怪物の頭に倒れ、怪物を殺してしまう。
すると木の幹は本流となり、枝は支流となつて、水がふ
たたび村へ流れていく (TII)。

この説話は〈欠乏〉—〈欠乏解消〉という二個の中核
的なモティーフ素のみでなりたっているもっとも簡単な
形態の説話である。

このようなモティーフ素のみで構成されている説話は稀
で、次にこれら中核的なモティーフ素の間に〈禁止〉
(Interdiction) —〈違反〉(Violation) という介在的モ
ティーフ素が入る場合を検討してみよう。

「トリックスターが規則を破り、子供たちは死ぬ」の
話では、

トリックスターは子供たちを袋に入れて旅する。子供
たちの空腹を思い、何かを食べさせようと思う (I)。折
しも現われた老いた熊を殺し、子供たちに食べさせる
(II)。その折、トリックスターはある男から禁じられ
ている事柄が頭にある (III)。しかし、彼はこれを無視
してしまう (Viol)。しばらくして袋に入っている子供
をのぞいてみると、みな死んでいた (Consequence)。

この話では、〈禁止〉—〈違反〉—〈結果〉というモ
ティーフ素の連鎖が〈欠乏〉—〈欠乏解消〉の間にはさ
まれて典型的な例である。

同じタイプの説話だが更に変形したモティーフ素の連
鎖からなる説話で興味ある例を観察してみよう。

「チノーク・インディアンの起り」では、老いた雨の
風が北へ旅をする時、巨人の老人に会う。南の風は空腹

のため、かの女に食物を乞う(「I」)。巨人の女は、食べものはないが、その代りに網がある。これをあげるからそれで魚をとりなさいと言う。言われたとおり南風は網を大洋に張り、小さな鯨をつかまえる(「II」)。ナイフを取り出し、鯨を切ろうとすると、その老巨人はナイフで切ってはいけない(「Int」)、背中を割るようと言う。南風は老女の言葉に心を止めず、鯨を十文字に切る(「Viol」)。するとこの鯨は大きな鳥に変わり(「Conseq」)、空中へ飛んでいってしまう(Attempted Escape)。この鳥がサンダーバードである(Explanatory Motif)。サンダーバードは、やがて、インディアンを生む。この話では「欠乏」——「欠乏解消」のモチーフ素が中核になっているが、そのなかに「禁止」——「違反」——「結果」——「脱出の試み」という構造が介入し、話のしめくりとして「変身の話」が登場している。また、説明的モチーフが最後にそえられ話の余韻を醸成している点、注目に値する。通常、話の最後にみられる変身は、前の出来事と関係がない。次のシャイアン族の間にみられる「尖った足」では、足の先が尖っているため、走って行ってはひょいと木のところへ跳んではそのままくっついていられる男がい

る。暑い日など大変よい。しかし、この芸当は四回以上はできないことになっている。ある日、一人の白人がこの男を訪ね、自分の足も尖らせてくれと頼む。彼は承諾する。だが、一日に四回しかやるなと言う(「Int」)。白人はすっかりいい気分になり、次から次へと跳びはね、木にくっつく。得意になっているうちに、遂に、五度目も高く跳んでしまう(「Viol」)。すると彼の身体が股まで木の中へはいってしまい、木にくっついてしまう(「Conseq」)。

この話では、「禁止」——「違反」というモチーフ素の連鎖が、「欠乏」——「欠乏解消」の間に介入することなく、それだけで独立して存在しうる場合である。

オノンダガ族の民話では、インディアン一行が旅を重ね、獲物の多い狩猟地に着く。そこには小屋も建てられ、子供たちは娯楽に踊りをおどっている。ある日、一人の老人がやってくる。彼はダンスを止めるように(「Int」)、さもないと、必ず、悪いことが起るとかれ等に警告する。子供たちはそれを気にもとめず、踊っては食べ、食べては踊っている(「Viol」)。ある日、子供たちが踊っていると頭がくらくらし、空中へ舞いあがっていくのに気づく

(Conseq)。かれ等は、やがて、流れ星になる (Explan Mot)。

この話も〈禁止〉―〈違反〉というモティーフ素の連鎖が〈欠乏〉―〈欠乏解消〉の間にはさまれることなく、そのみで独立して起っている点で、前の民話と同様の型のものである。このパタンの中心をなす事柄は不服従であり、このようなパタンの場合、〈違反〉―〈結果〉というモティーフ素の連鎖が、必然的に続いてくる。更に、話の最後に説明的モティーフとして「変身」の話がそえられているが、これはアメリカ・インディアンの民話のひとつの一般的な特徴ともいえる。

次の太陽が聲に難題を与える話では、

主人公はサケの腹から生れる。彼はやがて人間の養子となる。ところで、彼にはおかしかならぬ事がある (Inf)。ところが彼はこれをおかす (Viol)。そのため彼は死ぬ (Conseq)。彼の死体は川に入れられる。すると彼はサケとなって蘇生し (Ab), サケの国へ連れていかれる。そして人間である養母のもとに戻る。

このお話も北米インディアン民話のうちでもっともよくお目にかかるモティーフ素の連鎖、〈禁止〉―〈違反〉

―〈結果〉―〈脱出の試み〉からなっている。

シャイアン族の間にみられる「目玉の奇術師」では、木の大枝に登り、自分の目玉をとび出させ、それを枝に吊り上げてはまた呼びもどすことのできる男がいる。ある日、一人の白人が教えを乞いにやってくる。男は教えてやるが一日に四回以上やらぬようと警告する (Inf)。やがて、白人は一番高い木のとっぺんまで目玉をとび出させ、それを呼びもどせるようになる。そのうち彼は警告を無視し、自分の好きなだけできると考え、実行する (Viol)。目玉は木の太枝にくっついたまま離れぬ (Conseq)。彼は盲目になり、疲れ果て横になる。夜になると、二十日ねづみが現われる。彼は二十日ねづみと種々の取引話をした末、ねづみの目玉を獲得する (Ab)。そのためその目で物を見ることができるようになった。

この話も、前の説話と同様、〈禁止〉―〈違反〉―〈結果〉―〈脱出の試み〉というモティーフ素の連鎖からなっているが、最後のモティーフ素の用い方が面白い。恐らく二十日ねづみをだまし、たぶらかし、目を手に入れたのであろう。

難題説話は北米インディアンの間でほとんど全域にわたってみられる説話である。そのモティーフは説話の名称が示すように、ある課題または試練 (Task) ⁽¹⁷⁾ が主人公に課され、その課題を達成 (Task Accomplished) ⁽¹⁸⁾ するという〈課題〉—〈課題の達成〉の二個のモティーフ素が基本となっている。

天地創造に関する説話「潜水動物」(A812) ⁽¹⁹⁾ では、創造主が大海原に舟を浮かべている。陸が無いため (L)、彼は動物たちに命じ、海の底から土を採ってくるように命ずる (I)。多くの動物が試みるが、いずれも失敗する。遂に、ジャコウネズミが土を持つてくることに成功する (TA)。このようにして陸地が創造される (L-I)。

この説話では、見渡すかぎり大海原のみであった世界へ、創造主から使命を託された動物が、見事に与えられた課題を果たすという問題解決のお話で、まさしく説話の不均衡から均衡への移行が明確にみられる。モティーフ素の中核をなすのはあくまで〈欠乏〉—〈欠乏解消〉

だが、その介在的モティーフ素として〈課題〉—〈課題の達成〉というモティーフ素の連鎖が入れられていると考えられる。天地創造に関する他の説話で「太陽に衣を焦がされる」(A728) ⁽²⁰⁾ では、

少年が太陽に衣を焼かれる。彼は怒り、妹の恥毛をもって輪をつくり、太陽をわなにかける。そのため暗黒がおとずれる (L)。そこで動物たちの間で相談がされ、太陽をわなから逃すことに話がまとまる。ある動物にその任務を課す (I)。その動物は見事にわなをかみ切る (TA)。光はもとのようにかれ等のもとに戻ってきた (LI)。

この説話においても、〈欠乏〉—〈欠乏解消〉という中核的なモティーフ素の連鎖が、明確にみられる。ただこの話では〈欠乏〉が最初からモティーフ素として現われていたのではなく、それが「行為」によって生じた点、「潜水動物」の場合と少々異なっている点が面白い。

イロコイ族の間にもみられる説話では、
夫が留守の間に、妊娠中の妻が殺される。殺人者は腹から双子をとり出し、一人はテント小屋、もう一人はやぶの中に捨てる。夫が帰って来、二人をそれぞれみつつけ、

魔法により育てる。二人はやがて成人し、自ら数々の冒険に挑戦し (T)、怪物を次々と退治する (TA)。

このような〈課題〉—〈課題達成〉のみのモティーフ素の連鎖だけで構成される説話は余り多くみられぬ。

7

次に、〈欠乏〉を解決する手段として、当然、欺瞞⁽²⁾という行為が考えられる。そこで〈欺瞞〉(Deceit)—〈成功〉(Deception) という形態のモティーフ素の連鎖を検討する。メノミニ族の「マナボジョーの冒険」では、マナボジョーは腹をすかして湖岸を歩いている。そのまわりに無数の水鳥がいたのでこれをご馳走にあづかるうと思ふ (L)。マナボジョーは鳥たちに皆で歌って踊ろうではないかと呼びかける。やがて鳥たちが集まる。彼は「さあ、太鼓をたたくから、おれのまわりで踊れ。できるだけ大声でうたえ。目をつぶったままでな。目を開けると永久に目が赤くなって痛むぞ」と言う (De)。鳥たちは大声で歌い、かつ踊る。マナボジョーは、白鳥、ガチョウと次々と殺し (Depn)、たっぷりご馳走にあずかる (LL)。

この話では〈欠乏〉—〈欺瞞〉—〈成功〉—〈欠乏の解消〉というモティーフ素からなる話で、欠乏の対象となるのが獲物であり、このような類話はかなり多く各地で見られる。

ミクマク族の間にみられる「翼で風を起こした鳥」では、

あるインディアンの家族が住んでいる。かれ等は魚をとって暮らしている。ときに、天候が荒れ、魚がとれず、かれ等は飢えそうになる (L)。ある老人の示唆により、岸に打ちあげられた魚でもとろうと出かける。ところで、ふとみると、はげしく風の吹きつける岩だなで一羽の大きな鳥が翼をはばたいている。これが風を起こしている原因とわかる。そこでその鳥に、あなたを背負い、岸辺まで運んでやろうと提案する。鳥を背負い最後の岩を降りるとき、わざとつまづく (De)。そのため背中の鳥は転げ落ち、片方の翼を折ってしまう (Depn)。以後、風はすっかり止み、再び、沢山の魚がとれるようになる (LL)。

この説話は前の説話と全く同じモティーフ素の連鎖からなるお話で、〈欠乏〉の対象が獲物である別の一例で

ある。

トリックスター⁽²³⁾の説話のなかでもっともよく耳にする文化英雄マナボジ^ヨの話では、

(a) ある日、マナボジ^ヨは二本の木が風により悲しうに擦れあっている音を聞き、同情し、木に登る、ところが彼は枝にはさまれ動けなくなる。その間に食物はみな食べられてしまう^(L)。漸く、身は自由になったものの食べ物が無い。彼は野牛の頭蓋骨をみつける。そこで彼は蟻に化ける^(DeG)。そして頭蓋骨の中に入り^(Depn)、脳味噌をたらふく食べる^(LI)。

(b) それから彼は人間へ、そして鹿の死体へと、次々と化ける。鹿の死体に化けたのはそれなりの理由がある。彼は以前、空へ舞い上りたく^(L)、そのため禿鷹に頼んだ。ところで、禿鷹は彼を背にのせ空へ舞い上りはしたものの、中空で、彼を落した。そこで、彼は考えたのである。今度は彼は鹿の死体に化け^(DeG)、禿鷹を待つ。禿鷹は肉を求め、下りてくる^(Depn)。そして鹿の肉をついばみ始める。そこで彼は禿鷹を殺すことに成功する^(LI)。

欠乏を解消する場合、もっともよく用いられる手段は

相手を欺くという手段である。トリックスターが捕物をとらえるためにおこなう変装はまさしくこれである。この説話では〈欠乏〉―〈欺瞞〉―〈成功〉―〈欠乏解消〉という欠乏解消のための典型的なモチーフ素の連鎖群が二つ連なっている場合がみられる。

ブラックフット族の間にみられる「べてん師の競争」では、

(a) あるじいさんが歩いていると、シカと大ジカが「リーダーのあとについて」というゲームをやっているのに遭遇する。じいさんはシカと大ジカの肉を欲しいと思ひ^(L)、ゲームの仲間に入れてくれと頼む。彼は先頭に立ち、あちこち走りまわったすえ、崖の端まで来、そこから跳び下り気絶してしまう。しばらくして起きあがり、ほかの者についてこいと呼びかける。シカたちはじいさんの気絶を見ていたため、いやだと言う。じいさんは「なあに、ただひと眠りしたかっただけさ」とみなに言う^(DeG)。そこでシカたちはじいさんの言うとおりに跳びおり^(Depn)、みな共に死んでしまう^(Conseq)。じいさんは崖から落ちて死んだ動物たちの肉をとるのに大童である^(LI)。

(b) 肉をとり終ると、そこを去り、キャンプ場所を探す。そこで肉を吊るして干す。やがて、コヨーテがやってくる。コヨーテは首に貝がらをつけている。じいさんはこれが欲しくなる(H)。他方、コヨーテは肉を欲しい(H)。コヨーテの片足は、けがでもしたように、しばつてある(Dec)。じいさんはコヨーテに提案する。長距離競争をやろうと。コヨーテは了承する。コヨーテは最初はゆっくり走り、引返点になると包帯をとり、じいさんをひき離し(Depn)、キャンプ場へまっしぐらに飛んでゆき、肉を食べはじめ(II)。だいぶたってからじいさんはキャンプ場へ着いたが「肉を残しといてくれ、肉を残しといてくれ……」とさけび続けたという。(a), (b)のお話は連続しているものであるが、いずれも〈欠乏〉—〈欺瞞〉—〈成功〉—〈欠乏の解消〉というモティーフ素の連鎖からなる延長的なお話である。いずれも競争する話として興味深い話といえる。

8

オジブウェイ族の説話では、
二人の妻をもつ男がいる。彼には年長の妻との間に息

子がいる。男は息子と妻との関係に疑念をいだき息子を殺そうと思う(H)。彼は息子を島へ連れ出し、置き去りにする(H)。するとセイウチが彼に近ずき、本土に連れてゆくという(H)。もともとセイウチは雷が苦手である。そこでセイウチは天候について尋ねる。彼は晴れていると騙す(Dec)。息子はセイウチを騙しつづけとうとう浅瀬のところまで辿りつく(Depn)。しかしその時、嵐が起り、雷のためセイウチは死ぬ(HI)。

このお話で、セイウチは息子の母が魔法により派遣したものであり、嵐は男(父親)が魔法により起したものである。

説話では、二人の親の魔法くらべという形となり、息子の援助者(セイウチ)は母親が用意し、その援助を妨げるのが男(父親)となっている。すなわち、二つのモティーフ素の連鎖の交錯——一人の少年(息子)を中心に、父親の面からみたモティーフ素と母親の面からみたモティーフ素——が明確にみられる。前者は、父親の息子への疑念による殺意(H)にはじまり、それを実行するため試練を課し(H)、セイウチ(息子の代り)を殺すことに成功する(HI)。他方、後者は、セイウチにその

課題をまかせるにあたり、それを欺き (DoG)、任務を成功させ (Depn)、息子を安全に本土におくっている (LI)。いずれの場合も「欠落」(L)を除去するため、魔法⁽²⁴⁾を手段として用いたところに大きな特徴がみられる点、前の説話とともに、注目に価す。

次に、「太陽が盗まれる」(A七二二)⁽²⁵⁾、「季節を盗む」(A一一五)⁽²⁶⁾、「光りを盗む」(A一四一)⁽²⁷⁾などの説話にみられる「を盗む」というモティーフのなかで「どのようにしてピーパーは、火を盗んだか」を通し、もう少し詳細に検討してみよう。

この種の説話では「欠乏」→「欺瞞」→「成功」→「欠乏解消」というモティーフ素の連鎖が中核をなし、そのなかに「課題」→「課題達成」というモティーフ素が組みこまれている。

(A) 地上に火がなかった (L)。動物と人間は火を欲しかった。火は空の上にある。あらゆる動物は空へ行くための矢の道をつくった。皆、天上に昇ったが、結局、ピーパーがその使命を果たすことになる (H)。彼は火のある家へ入るため、わざとわなにかかり、死んだふりをする (DeG)。思わくどおり彼は火の家の酋長の家へ連れて

いかれ、皮をはがれる。しかし、最後の一時、すきを見て火を盗み、逃げ出す (Depn)。火は彼によって、無事、地上へ運ばれ (TA)、火をとますことができた (LI)。同様に、火を盗む話で、クリーク族にみられる「うさぎが火を盗んだ話」を取りあげてみよう。

(B) 地上にはけものしかいなかった。かれ等は寒さにふるえていた。けものたちは火をさがすため (L)、みそさざいをおくる。彼は火を見つけるが、それを盗む方法を知らぬ。けものたちの間で相談がされる。結局、うさぎのバシコラにこの仕事をやらせることになる (H)。うさぎは承知する。しかし、コヨーテは、うさぎが命じられた仕事をやるなどと思わぬ。そこでうさぎをためす。最初は赤山ありを袋にあつめてくることを (H)、うさぎはかれ等をうまく騙す (DeG)。例えば、赤山ありには次のように言う。コヨーテがきみたちは絶滅しかかっており、とても皮の袋を満たすほどはいないと言っている (DeG)。すっかり誇りを傷つけられた赤山ありは袋をいっばいにする力のあることを証明するため、いっせいに袋の中に入る (Depn)。うさぎはすぐに口を閉め、村にもって帰る (TA)、という具合である。

コヨーテによる試練をみごとに克服し、漸く、火を盗みに出かけたうさぎは、首長の守る神聖な火のある村に着く。うさぎは、自分は火に折りをささげるため (Dec)、遠く旅をしてきた魔術師だと、首長に話す。やがて、うさぎは夕の踊りへの参加がゆるされる。うさぎはみなとともに踊りながら火に近づく。そして燃える小枝を頭にさし、いちもくさんに村から飛びだし (Depn)、無事、獲物をたずさえ、自分の村に帰る (Ta)。このようにして火が地上にともされた (Ti)。しかし、うさぎはこの冒険で耳の先端をやけどし、今でも黒くなったままである (Explan Mot)。

(A) の話では、〈欠乏〉―〈欺瞞〉―〈成功〉―〈欠乏の解消〉というモチーフ素の連鎖が中核をなし、そのなかに〈課題〉―〈課題達成〉というモチーフ素を組みこまれている典型的な例である。他方、(A)の類話(B)では、話がやや複雑になり、〈欠乏〉―〈欠乏の解消〉をはかる過程のなかで、主人公のうさぎが、質的に二重の試練、つまり、コヨーテによる数々の試練と動物から課されている火を盗むという試練に遭遇する点、また、それぞれの場合におき、〈欺瞞〉―〈成功〉の面におい

ても同様の経験を強いられている点など、つまり、あるモチーフ素の連鎖内にみられるカッコ入りモチーフ素の連鎖がみられる点、類話の重層性が色濃く濃縮されている。また、話のしめくりとして説明的モチーフが現われている点にも注目したい。

次の「汚れた少年」として知られている話では、いつも超自然的存在物が人間の姿をとる (Dec)⁽²⁸⁾。酋長の娘を欲しいものための公開競技が開かれる (Ti)。身なりの汚ない少年がその競技におき、勝利をおさめる (Ta)。彼は娘と結婚する (Depn)。三日後、その少年は、自分の姿はいうにおよばず、周囲のあらゆるものを姿を変えてしまう。彼の妻も魔法により美しくなる (Explan Mot)。

このお話は、〈欺瞞〉―〈成功〉という中核的モチーフ素の連鎖の間に、〈課題〉―〈課題達成〉という介在的モチーフ素の連鎖が入っている。また、最後に、しめくりとして、説明的モチーフが付されていることに、前の説話と同様、注目されたい。

ナバホ族の間ではよく知られている「巨大なオオシカ退治」の話では、

主人公の英雄はやはり超自然的存在であり、太陽の息子である。彼は成長すると数々の冒険に出かける (I)。最初の冒険はオオシカ退治である。退治の途中、トカゲにあう。トカゲはその皮を主人にかぶせ、変装させる (De)。彼はトカゲの姿でオオシカに近づき、地ネズミの応援をも得て、彼を射る (TA) (Dpn)。次の敵は大鷲である (I)。主人公はオオシカの皮をかぶり、鷲の巢のそばで死んだふりをする (De)。鷲は彼をさらって巢へ運ぶ。そこで彼はオオシカの角で鷲の夫婦を殺す (TA) (Dpn)。彼はやがてこうもりの助けにより、地上に戻る (Explan Mot)。

この説話でも〈欺瞞〉—〈成功〉というモティーフ素の連鎖と〈課題〉—〈課題達成〉というモティーフ素の連鎖の重層性のみごとみられる。

フーバ族の説話では、

一人の娘がいる。かの女は祖母から二つの根の茎のある植物は絶対に掘ってはいけないと言われている (I)。娘はこの言葉を守らず二つの根の茎を掘る (Vio)。すると根は子供に変わり (Conseq)、娘を母親と呼ぶ。しかし、娘は子供をみとめぬ (I)。子供はやがて成長する。

ある日、娘は、その子が白いシカを殺してくれるなら (I)、その子を息子と呼んでもよいとひとりごとを言う。彼はまもなく母親 (娘) ののぞみをかなえる (TA)。かの女は、以後、その子を息子とみとめる (II)。このお話は、娘を中心とする〈禁止〉—〈違反〉—〈結果〉というモティーフ素の連鎖と子供を中心とする〈欠乏〉—〈課題〉—〈課題達成〉—〈欠乏解消〉というモティーフ素の連鎖が連動されたものである。

9

小論では、民間説話を構造的にとらえようとするにあたり、それを構成する要素をモティーフ素と考え、そのモティーフ素の連鎖のあり方に焦点を絞り、考察した。

ある民話は〈欠乏〉と〈欠乏の解消〉という結合のみで一個の民話を形成しているし、また、他の民話は、複数のモティーフ素の連鎖をなしている。ここでは、原則として、〈欠乏〉と〈欠乏の解消〉の間に介在するモティーフ素の連鎖として、先ず〈禁止〉—〈違反〉 (第五章) を、次に〈課題〉—〈課題達成〉 (第六章)、続いて〈欺瞞〉—〈成功〉 (第七章) を取りあげ、最後に、延長

的な話を構成するモテーフ素の連鎖(第七・八章)を扱った。それらのなかには〈欠乏〉、〈欠乏の解消〉を欠いた説話も含め言及しているが、それはそれなりの意味をもった説話と看取し、論じられたものである。

とりあげた民話はおよそ二〇に過ぎぬが、いずれも各地域における各部族のもつ代表的なものばかりである。

これらの民話を通じ、先ず言えることは、北米インディアン(インディアン)の民話ではモテーフの結合、集積の面におき、ほとんど一貫性らしきものがみられぬという点である。そのため民話を整然と類別することが不可能である。したがって、ある程度、類話とおぼしき説話をモテーフ素の連鎖を通じ、ひとつの章に入れ、並列してみたものの、いかにも釈然としない面が多々みられる。これは北米インディアン(インディアン)の民話は、ヨーロッパの民話に比べ、中核となるモテーフ素の間に介在するモテーフ素の数が少ないわりに、そのボタンが複雑であるためであろう。すなわち、モテーフ素の深度が限定されているため、延長的な話が多いわりに、複合的な話が少ないということの意味している。つまり、モテーフ素の深度が限定されるということとは、説話のなかの〈欠乏〉のモテーフ

素が解消される際、短時間によって、または比較的簡単なプロセスによってなされるということの意味するわけである。このような視点からみると、北米インディアン(インディアン)の民話は、ある意味で、比較的単純な説話により構成されているということになりそうである。

10

最後に、これらの民話のうちに秘められている精神性につき考察してみよう。

これらの民話は、つねに、素朴な人々の願望のこめられた夢から生まれたものである。説話は、しばしば、主人公を大きな試練のまえに立たせ、危険にむかわせる。そしてその興味は、最後に達成される勝利、または、願望達成である。ここでは説話が主人公に与えるものは物ではなくて、種々の可能性である。つまり、主人公はなにか行動しなくてはならぬところへ導かれる。そして彼により、行動がなされる。すなわち、主人公と課題(試練)が出会う、ちょうどその点で実現される。それ以前にもそれ以後にも関係しない。こういう点からみると、説話とは普遍的な意味のある内的観照であるといえる。

そしてその内的観照のなかでは、すべてのものからヴェールがはぎとられ、透明なものとなってわれわれの前に姿をあらわすのである。その際、われわれは、説話を現実世界の本質像として把握しているのではなく、現実世界にたいするコントラストをなす像として考えているのである。つまり、説話のなかにはたらいっている精神性は、現実としての世界を否定し、素朴な願望がすべて満たされるある別な世界を求めている。いいかえてみるならば、代償的空想世界を求めているのである。

また、説話は、主人公が自らかかわっていることだけをいっているのではなく、なにか普遍的なものを、みずからのなかに秘め、それを顕示しようとしている。あのコヨーテをはじめ、ビーバー・うさぎ・ジャコウネズミなどの行動ひとつ取ってみても、そこには何か普遍的な要素がみられる。その要素は、元来、育ってきた領域からきわめて純粹にとり出されているため、それだけこんどは他の領域をも具象化する能力を胎胎しているというわけである。おそらくその要素はなにか人間の心のうちにひそむ願いのシンボルとでもいえるものであろう。それは人間の無意識な内的世界の数々の事実を具象化する

仲介者としてその役割を演じているのであろう。このように考えてくると、民話は原始的文化にとり、欠かすことのできぬ機能を果たしているといえる。それは、時には、信念をあらわし、高揚し、法典化する。説話のなかのモティーフ素のうちには〈禁止〉(タブー)―〈違反〉がひんばんにみられるのはこのような精神活動のあらわれである。民話は人間の倫理性を擁護し、時には、これを強いる。また、それは祭儀の有効性をも請けあい、人間を導く実際上のルールをそなえもっている。このような民話はいかこれらの文化の重要な因子なのである。それは一見すると、のらくらな、たわいのないお話のようだが、実際にはそうではなく、原初的な信念と倫理的知恵を充填した実用主義にもとずいた憲章なのであり、その機能は、かれらのもつ伝統を強固にし、それに大いなる価値をそえ、それを現在よりもっと高い、そしてもっと良い、そしてもっと超自然的現実へと高揚し、それに權威をそえるものである。ちなみに、ヒーカールルヤイ・アパッチ族をはじめ多くの部族にとり、実際、民話は自分達の行動や信念、そして儀式を導く点で、もっとも重要な機能をなしていることが明白になっている。かれ等

にとり、民話は、自分達がそれを土台として行動する知識の総和・知恵の総和となっているのである。

(1) S・トンブソン 新木博之・石原綏代訳『民間説話』上、下、社会思想社 一九七七年。

(2) 民話の当該分野を含め、その研究は測り知れぬくらい存在する。そのなかの主なものを列挙する。

1、インド・ヨーロッパ理論 昔話を古い神話と関係させ、その起源をアリアン民族に帰す。とくに、インドゲルマン民族にその起源を求める見解をとったのがグリムである。

2、インド学派の理論 テオドール・ベンファイはパンチャタントラのドイツ語訳の序文で、すべての民話はインドから由来したと考えている。

3、人類学説 E・B・タイラーおよびアンドリュウ・ラングは、民話の起源をすべての民族の原始時代に求めた。

4、地理的、歴史的研究法 民話を地理的、歴史的方法により研究した人としてユリウス・クロニン、カール・クロニンがあげられる。かれ等は民話の原型を求める際、民話の類話を比較し、あとからつけ加えられた物語をとりのぞくことにより、民話に地理的、歴史的秩序を与えた。

5、民話の蒐集作業を円滑にするため、現在、「民俗学連盟」(Folklore Fellows)と、この国際的連盟がある。こ

の機関は、蒐集カタログの制作、出版等を手がけるため、種々の国々の研究団体のため、支部あるいは代表者組織を設ける活動を援助している。現在、昔話の目録「昔話の型の目録」(FEC 3)の完成をみている。

(3) たしかに動物物語の起源はインドに求められる。しかし、インド人は西洋から借りた物語を、再び、西洋に送り出したという事実がみとめられている。

(4) S・トンブソン 荒木博之・石原綏代訳『民間説話』(f)社会思想社 一九七七年。二一七頁

(5) 前掲書 卷末 一三—三三頁

(6) 前掲書 卷末 一頁—一二頁

(7) 北米インディアンの場合、神話と説話というジャンルを明確に引くことは不可能である。フランツ・ポアズも『一般人類学』のなかの章、「神話と民間伝承」でこの点にふれ言及している。

(8) S・トンブソン『民間説話』上三一頁。

(9) 前掲書、上・下巻でこみられた話型はすべて、内容をもととした分類であり、形式や構造に従ってなされた分類ではない。

(10) ウラジミール・只・ブロップ 大木伸一訳『民話の形態学』白馬書房 一九七二年。四七頁—九八頁。ブロップは「登場人物の機能」におき、その機能を分類した。彼のいう「機能」は、バイクのいう「モティーフ素」に近いものである。

(11) ケネス・L・バイクは『人間行動の構造に関する統一
的理論との関係における言語』におき、特徴相の最小単位
をイミミック的モティーフ、即ち、モティーフ素と名づけ
た。

(12) 北米インディアン民話の形態論に関しては、アラン・
ダングス 池上嘉彦他訳『民話の構造』——アメリカ・イ
ンディアン民話の形態論——大修館書店 一九八〇、に
詳しく論じられている。殊に、「モティーフ素の型」にみら
れる論議の展開は未だかつて試みられたことのないもので
ある。小論はダングスの言う「モティーフ素の連鎖」に啓
発され、他方、ウラジミール・R・プロップの言う「機
能」論を重層させながら考察したものである。プロップは
説話中の登場人物の機能を分析し、機能のほとんどが対を
なしていることに着目した。そして彼は、民話の構成はず
べてこれらの対をなした機能のヴァリアントからなってい
ることを証明するため、その図式を作成している。

(13) ウラジミール・R・プロップ 大木伸一訳『民話の形
態学』四八頁—四九頁

(14) 前掲書 五九頁—六一頁・プロップは欠落の対象とし
て次のような形態をあげる。(1) 一般に人間の不足 (2) 魔法
の手段 (3) すばらしいものの不足 (4) 魔法の何かの不足

(5) 窃取

(15) 前掲書 七〇頁—七九頁 プロップは魔法の手段につ
き、「規定」—「調達」、魔法の入手というモティーフ素と

して扱い、魔法上の手段となるものを(1)動物 (2)魔法上の
助けが出現する対象 (3)魔法的な性格をもつ対象などと考
えている。そして更に、各手段がいかに行為としてあらわ
れてくるかを述べ、それを九形態に分けている。即ち、(1)
手段が直接、譲渡される (2)手段が指摘される (3)手段が
用意される (4)手段が売買される (5)手段が、偶然、主人
公に当る(見つかる) (6)手段が突如として自然にあらわ
れる (7)手段が飲まれたり、食べられたりする (8)手段が
盗まれる (9)さまざまな人物が自分を主人公の自由に委せ
る。

(16) 前掲書 八二頁—八六頁 プロップは「欠落」—「欠
落の解消」というモティーフ素の連鎖を「規定」—「不幸
もしくは欠落の除去」の機能として考え、処理している。
その具体的行為のあらわれかたを次のように列挙する。(1)
探しているものが、一度に数人により、その行為の急な変
更によって入手される (2)探しているものが餌(交換をあら
わす)により、獲得される (3)先行する行為の直接的結
果として探しているものが獲得される (4)探しているもの
が魔法上の手段を用い、瞬間的に獲得される (5)魔法上の
手段を用い、飢えが救われる (6)探しているものを捕獲す
る(窃取) (7)魔法にかけられていた者の魔法がとかれる
(8)死人がよみがえる (9)盗み返す場合と同様に、ある動物
が他の動物にある行動をさせる (10)捕われの身が自由にな
る。

- (17) 前掲書 六五 — 六八頁 (XII), 八一頁 — 八二頁 (XVII), 八六頁 — 八七頁 (XXI), 九一頁 — 九三頁 (XXV) ⅡX プロップは、主人公が試練を受ける場合を〈規定〉 — 〈寄与者の第一機能〉と考えて次のように規定している。
- (1) 寄与者が主人公をためす (2) 寄与者が主人公を歓迎し、訊問する。この形は試練の弱い形態 (3) 瀕死で役務を乞う (4) 捕われた者が自由を乞う (5) 主人公に許しを乞う (6) 論争者が入手品の分配を要求する (7) その他の願いごと (8) 敵意ある存在が主人公を破滅しようとする (9) 敵意ある存在は主人公と戦いに入る (10) 主人公に魔法上の手段を見せ、取りかえようと提案する
- ⅡXV 「主人公が狂われる」場合を〈規定〉 — 〈照準〉〈標印〉と規定している。
- ⅢX 「主人公が迫害を受ける」では、〈規定〉 — 〈迫害〉〈追跡〉とし、次のように規定している。(1) 追跡者が主人公を追って飛ぶ (2) 彼は罪人を追い求める (3) 彼はさまざまの動物になり、主人公を追う (4) 追跡者たちは、誘惑物に気をとられ、主人公を追いかける途中で停る。(5) 追跡者は主人公を食べてしまおうとする (6) 追跡者は主人公を殺そうとする。
- ⅢXV 「主人公に難題を課す」では、課題(試練)そのものの性質・種類について言及されている。(1) 食物・飲物 (2) 火 (3) 謎とき (4) 夢 (5) 選別 (6) 力・巧妙性・勇氣 (7) 忍耐強さ (8) 作ったり、用意する課題

- (18) 前掲書 六八頁 — 七〇頁 (XII), 八二頁 (XVII), 八七頁 — 九〇頁 (XXI), 九三頁 (XXV) ⅢXIII 〈規定〉 — 〈主人公の反応〉と規定し、主人公は将来の寄与者の行為にたいし次のように反応する。(1) 主人公は試練に耐える(耐えない) (2) 主人公は歓迎に応える(応えない) (3) 彼は死者に奉仕する(しない) (4) 彼は捕われたものを放す (5) 彼は懇願者を救す (6) 彼は分配をすませ、論争者たちを和解させる (7) 主人公は何か別の奉仕をする (8) 主人公は敵意ある存在の手法を自らとり入れて、彼に対するたくらみから救われる。(9) 主人公が敵意ある存在に勝つ(あるいは勝たぬ) (10) 主人公は交換に同意するが、直ちに魔力を用いて、対象を寄与者に渡す
- ⅢXVIII 〈規定〉 — 〈勝利〉では、おおむね「……に勝つ」と規定されるが、逆に、「……に殺される」、「……に追われる」という否定的形態もみられる。
- ⅢXIX 〈規定〉 — 〈救い〉と規定され、次のように列挙されている。(1) 彼は空中を運ばれる (2) 主人公は走り、追跡者のために障害を置く (3) 主人公は逃げる途中、自分を見えなくしてくれるものに気づく (4) 主人公は逃げる途中、隠れる (5) 彼は急に動物や石などに変身して救われる (9) 彼は自分を食べさせない (7) 彼は殺されずにすむ (8) 彼は木へと飛び越える
- ⅢXXIV 〈規定〉 — 〈解決〉と規定し、課題によって課せられる以前、あるいは出題者の与えた時間以前に、解決さ

れている。

(19) S・トンブソン 荒木・石原訳『民間説話』(下)巻末一三頁

(20) 前掲書 一三頁

(21) ウラジミール・R・プロップ 大木訳『民話の形態学』五四頁―五五頁 敵対行為という説話中の行為は、
 〈欠乏〉―〈欠乏解消〉、〈禁止〉―〈違反〉、〈欺瞞〉―〈成功〉という機能のための準備であり、民話の予備部分であると言われている。そしてこの敵対行為がまず民話の端緒となるのである。

(22) 前掲書 五二頁―五三頁 プロップは相手を欺しにかかる場合を〈規定〉―〈悪計〉の機能と考え、偽装行為、変装、魔法の使用、欺しの策や暴力などをそのカテゴリに入れてゐる。

(23) トリックスターとは、詐欺師、ベテン師、いたづら者の意で、北米インディアンの間では、彼は創造者であって破壊者、贈与者であって反対者、他人をだます人であって自分がだまされる人間である。また、トリックスターが特定の動物、ウサギ、コヨーテ、など同一視されることもある。トリックスターのやるありとあらゆるところに、つねに笑い、ユーモア、アイロニーが充満している。

(24) 『民話の形態学』八二頁―八六頁 プロップは第三章登場人物の機能で魔法民話を扱い、その機能を三一の型に分類したことは既に述べたとおりである。彼は XIX にお

いて、殊に、〈不幸〉または〈欠落〉の除去の際、「魔法」が使用されていることに言及している。

(25) S・トンブソン 荒木・石原訳『民間説話』(下)巻末一三頁

(26) 前掲書 一四頁

(27) 前掲書 一四頁

(28) 『民話の形態学』五二頁―五三頁 プロップは、犠牲となる相手またはその持ち物を手しようとする際、相手を騙すために偽装という方法をとると述べている。

(29) 「根が子供に変わる」というのは魔法によってであろう。その子供を娘が認知しないという行為を〈欠乏〉(人)と規定する。その理由は、一般に、〈欠乏〉または〈欠落〉が認識される方法は数多くみられるが、その原因として、「憎しみ」の念により生ずる場合が多くみられるからである。憎しみの気持は〈欠落〉からしばしば生ずると思われる。

参考文献

- 1 青木晴男『アメリカ・インディアン』講談社 一九七九
- 2 井之口章次『民族学の方法』岩崎美術社 一九七〇
- 3 稲田浩二・上田正昭『民話―伝承と創造』日本放送出版協会 一九七八
- 4 小沢俊夫編 中村志朗・青山隆夫訳『世界の民話』アメリカ大陸〔I〕ぎょうせい 一九七九

- 5 小沢俊夫編 関楠生訳『世界の民話』アメリカ大陸
〔II〕ぎょうせい 一九七八
- 6 河合隼雄『昔話の深層』福音館書店 一九七七。
- 7 皆川宗一『アメリカ民話の世界』岩崎美術社 一九七
七
- 8 アールネ、A・関敬吾訳『昔話の比較研究』岩崎美術
社 一九六九
- 9 クラーク、エラ・イ 山下欣一訳『アメリカ・インデ
ィアの神話と伝説』岩崎美術社 一九八一
- 10 ジェネップ、ヴァン 秋山さと子・弥永信美訳『通過
儀礼』思索社 一九七七
- 11 ダンダス、アラシ 池上嘉彦他訳『民話の構造』—ア
メリカ・インディアン民話の形態論— 大修館 一九
八〇
- 12 トンプソン、S・新木博之・石原綾代訳『民間説話』
上、下、社会思想社 一九七七
- 13 トンプソン、S・編 皆河宗一訳『アメリカ・インデ
ィアの民話』岩崎美術社 一九七〇
- 14 フランク、M—L・フォン 氏原寛訳『おとぎ話にお
ける影』人之書院 一九八一
- 15 プロップ、ウラジーミル・日大木伸一訳『民話の形態
学』白馬書房 一九七二
- 16 プロップ、ウラジーミル・日 齊藤君子訳『口承文芸
と現実』三弥井書店 一九七八
- 17 ブルースタイン、ジーン 皆河宗一訳『民衆の声』—
アメリカ文化とフォークロア— 晶文社 一九七六
- 18 ベッテルハイム、ブルーノ 波多野完治・乾侑美子訳
『昔話の魔力』評論社 一九七八
- 19 ベネディクト・R 米山俊直訳『文化の型』社会思想
社 一九七三
- 20 ユエ、ジェデオン 石川登志夫訳『民間説話論』同朋
舎出版 一九八一
- 21 ライエン、F・山室静訳『メルヘン』岩崎美術社 一
九八三
- 22 ライデン、P・ケレーニイ、K、ユング、C・G・皆
川宗一・高橋英夫・河合隼雄訳『トリックスター』晶文
社 一九七六
- 23 リューティ、マックス 野村滋訳『昔話の解釈』福音
館書店 一九八二
- 24 Bascom, William, "The Myth-Ritual Theory,"
Journal of American Folklore, Vol. 70, 1957.
- 25 Beckwith, Martha Warren, *Folklore in America:
Its Scope and Method*, Poughkeepsie, N. Y., 1931.
- 26 Dorson, Richard M., *American Folklore*, Chicago,
1959.
- 27 Dundes, Alan, *The Study of Folklore*, Prentice-
Hall, Inc., 1965.
- 28 Eliade, Mircea, *Birth and Rebirth*, N. Y., Harper

- & Row, Pub., 1958.
- 29 Gayton, A. H., "The Orphic Myth in North America," *Journal of American Folklore*, Vol. 48, 1935.
- 30 Levi-Strauss, Claude, "The Structural Study of Myth," *Journal of American Folklore*, Vol. 68, 1955.
- 31 Rooth, A. B., "The Creation Myths of the North American Indians," *Anthropos*, Vol. 52, 1957.
- 32 Taylor, Archer, "The Biographical Pattern in Traditional Narrative," *Journal of the Folklore Institute*, Vol. 1, 1946.

(一橋大学講義)